■研究発表論文

五箇山の念仏道場と仏教行事の変化に関する研究

The Transition of Nenbutsu Dojos and Religious Rites in Gokayama

瀧澤　侑加*　　黒田　乃生**

Yuka TAKIZAWA　Nobu KUROA

Abstract: A Nenbutsu dojo is a primitive form of a Jodo Shinshu Buddhist shrine, which were built throughout Japan after the 15th century. Nenbutsu Dojos were centers for missionizing local residents in small villages. It is well known that the residents in the Gokayama area are deeply religious Buddhists. Today, most of these dojos have been formalized into temples; only the Gokayama district in Toyama prefecture has many Nenbutsu dojos. The objectives of this research are to clarify the current situation of the transition of Nenbutsu dojos thorough field survey and interviews of the local residents. Nenbutsu dojos function not only as religious branches of the head shrines but also as community centers. The Dojo-mori (the manager of the dojo) takes on the role of a Buddhist monk in everyday duties, and local residents help to prepare foods, clean, etc. According to a case study of the Toga district, several religious rites had been abandoned because of aging and depopulation. Both the maintenance of the building and the performance of religious rites are important for retaining cultural heritage.

Keywords: *Toga-district, Jodo Sinshu, community*
キーワード：利賀地域，浄土真宗，コミュニティ

１．研究の背景

（１）研究の背景と目的

五箇山は，富山県の南西にある南砺市の平地域，上平地域，利賀地域からなる（図－1）。2004（平成 16）年の市町村合併以前はそれぞれ富山県東礪波郡平村，上平村，利賀村であった。日本有数の豪雪地帯で，気候風土に合わせて急傾斜の大きな茅葺屋根の合掌造り家屋が発達した。深い山々の中に集落が点在し，独自の文化が発展し継承されている。

五箇山では 15 世紀から浄土真宗の布教がはじまったと考えられており，現在まで篤い信仰が続いていることで知られている[1]。各地にある念仏道場は寄合いをはじめ集落の共同施設として活用されてきた「人々の心の拠り所」であり，地域社会の中心をなしていた[2]。しかし，急激な過疎化・高齢化に伴い共同作業や奉仕活動が停滞し，伝統的な行事の継承が困難になったと指摘されている[3]。五箇山の人口は最も多かった戦後の三分の一になり今後も減少が予想される。生活の基盤であった念仏道場の変化と現在の役割を把握することは，人口減少後のコミュニティ維持の要因を知るうえで重要である。本研究は五箇山の念仏道場の現状と変化を，行事と住民のかかわりから明らかにすることを目的とする。

図－1　五箇山および利賀地域の位置

（２）既往研究と本研究の位置づけ

念仏道場に関する既往研究として，宇治は 1980 年代に五箇三村の一部の集落について社会人類学的視点から宗教的講集団の詳細な調査を行い，利賀地域の利賀・上畠両集落を対象に仏教的信仰集団である「講」について，仏教的な組合が生活全般の基底を担う重要な意味をもつこと，「講」によって住民たちの横の連結が強化されていること，「講」という信仰集団と部落ごとに設立されている道場によって僧と門徒の間に強固なつながりが形成されていることの 3 点を指摘した[4]。そのほか，市川は福井県の民家と寺を対象に民家から道場を経て寺院へと発展していく空間の変化について明らかにした[5]。本研究はこれらの既往研究をふまえ，仏教行事と念仏道場の使われ方の変化を明らかにする。

（３）研究の対象と方法

五箇山三地域の念仏道場を目視調査した結果，全体で 6 箇所減少したことが明らかになった（表－1）。県の文化財に指定されているのは平地区の寿川念仏道場および上平地区の旧上中田念仏道場（写真－1）である。本研究は事例として，明治期から数が 3 分の 2 に減少し，道場（写真－2），寺（写真－3），内道場（写真－4），という多様な形態が見られる利賀地域を対象とする。

研究方法は文献調査，目視調査および聞き取り調査による。過去の寺・道場の概要は村史を中心とした文献調査を行い，現状は目視で確認した。詳細な行事の内容と利用の変化は，寺・道場が所有する資料による文献調査，住民に対する聞き取りによる調査

表－1　五箇山の念仏道場の数の変化

		平	上平	利賀	合計
明治期*		25	11	13	49
現状	道場	15	6	3	25
	内道場	1	0	3	3
	寺/寺号取得	8	4	3	15
	合計	24	10	9	43

*明治期の数および道場の内訳については平村史編纂委員会（1983）：平村史下巻，上平村役場編（1982）：上平村誌，利賀村史編纂委員会編（2004）：利賀村史３：利賀村より

*新潟市役所　**筑波大学芸術系

表－2　利賀地域の寺・道場の概要

集落	明治期の字名等	人口（註1）			寺または道場の有無（註2、註3）				建物の再建年
		1889（明治22）	2004（平成16）	2015（平成27）	江戸期	1942（昭和17）	1983（昭和58）	2014（平成26）	
坂上（西勝寺）		342	152	104	寺	寺	寺	寺	1922(大正11)
阿別当		184	73	52	道	道	道	内	内道場
上畠		213	66	30	道	道	道	道	1955(昭和30)
細島	東細島	67	18	13	道	道	内	内	倒壊後内道場
岩渕		141	36	20	道（註6）	道	道	道	1967(昭和42)
上百瀬	上百瀬川	267	126	80		内	内	内	内道場
利賀（興真寺）	下利賀と東下島	367	138	96（註4）	道	道	寺	寺	1965(昭和40)（寺号取得と同時）
大豆谷	南大豆谷	201	38	22	道	道	道	道	1977(昭和52)
押場		93	0	0	道	道			ー
北豆谷（斎光寺）		174	50	29	道	道	寺	寺	2004(平成16)屋根葺き替え
大勘場		312	30	16（註5）	道	道	道		1961(昭和36)
栃原		217	6	1	道	道			念仏道場跡が村指定史跡・廃村
栗当	九里ケ当	141	3	1	道	道			ー

註１　1889年、2004年は利賀村史編纂委員会編（2004）：利賀村史３：利賀村，992，　2015年は南砺市の統計（大字別住民基本台帳人口及び世帯数）
http://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/www/secfolder/johoseisaku/tokei_top.htm（平成27年9月7日参照）より

註２　1983年までは平村史編纂委員会（1983）：平村史下巻，917-919より、2014年は現地調査による

註３　「寺」は寺、「道」は道場、「内」は内道場

註４　利賀上村（66）、利賀下村（30）の合計

註５　大勘場（2）、千束（14）、中口（0）の合計

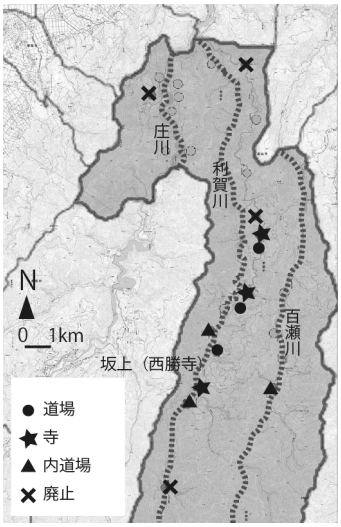
註６　安永~寛政年間（1772~1801）のものとされる五ヶ山道場書上には記載されていないが、寺伝史料によれば初代道場役とされる人物が天保9年(1839)に亡くなっていることや本尊の裏書に天保8年（1837）とあることから、江戸時代末期には成立していたと考えられる

写真－1　旧上中田道場（上平地区）

写真－3　興真寺（利賀地区）

写真－2　上畠道場（利賀地区）

写真－4　上百瀬道場内部
（内道場・利賀地区））



図－2　利賀地域の道場の分布

表－3　利賀地域の寺・道場のと行事の変化

実施主体		寺										在所							
行事名称		正月（修正会）		春彼岸		盆		寺の報恩講		オシチヤ（七昼夜）		オコウサマ（お講様）		ハツオザ（初御座）		ワカイモンコウ（若お講）		アマコウ（尼お講）	
実施時期		12月31日～1月１日		3月中下旬		8月中旬		10月～11月 8月下旬（西勝寺門徒）		11月～1月		9月～5月	11月～4月	元旦～1月中旬		12月～2月		1月～2月	
日数		１日		１日		1～3日間		1～数日間		7日間		月に2日		１日		１日		１日	
寺・道場	手次寺など	1950年前後	2014年	1950年前後	2014年	1950年前後	2014年	1950年前後	2014年	1950年前後	2014年	1950年前後	2014年	1950年前後	2014年	1950年前後	2014年	1950年前後	2014年
坂上（西勝寺）	西勝寺	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	△	△	×	×	△	×	△	△
上畠	西勝寺	○	○	×	×	×	×	○	○	×	×	○	×	○	○	○	○	△	△
細島（内道場）	西勝寺	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×	○	○	△	△	△	×
岩渕	西勝寺	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
上百瀬（内道場）	西勝寺	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○*	○	○	△	△	×	×
利賀（興真寺）	真光寺	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	△	△	×	×
大豆谷	真光寺	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	△	×	△	×
押場	真光寺	○	×	×	×	×	×	○	×	○	×	○	×	×	×	△	×	×	×
北豆谷（斎光寺）	専徳寺	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	×	×	×	△	×	△	×

○：道場・寺にお参りする　　△：行事はあるが道場・寺にお参りしない　　×：行事がない　　*おトキの場所はコミュニティセンターに変化
：変化がみられた行事

を行った。聞き取りの内容は戦後から現在に至るまでの仏教行事の様子と道場との関わりに絞り，2014（平成26）年7月20日から8月20日にかけて実施した。道場役（または住職）および70から90歳代の住民各集落1〜3名，合計36名を対象とした。

２．五箇山の念仏道場の概要

（１）念仏道場の概要

浄土真宗は，本来，伽藍を備えた寺院を建立する必要はなく，開祖親鸞の時代に寺院は存在しなかったが，その後徐々に寺院が建立された。原則として，浄土真宗の伝道は寺院ではなく念仏道場において行われた。念仏道場は15世紀終わりから16世紀にかけて蓮如・実如の時代に多数設立された[6]。当初は村の有力者または篤信家の民家に周辺の門徒共有の仏壇をしつらえ仏事やお勤めを行う「内道場（家道場）」と呼ばれる形態で，仏教行事のほか集落の集会所としての役割もあった[7]。その後，内道場が独立した建物になったものが念仏道場である。このため，道場の外観は民家とほとんどかわらないもの（写真−2）から寺院のようなものまで多様である。その後道場は特に17世紀中頃に最も盛んに寺号の取得が行われ寺院となった[8]。

五箇山では15世紀後半以降，平地域の西赤尾行徳寺と利賀地域の坂上西勝寺のほか，周辺にある複数の有力な寺院によって伝道と門徒の獲得が行われた[9]。その結果，五箇山門徒の手次寺は金沢，小松，越前まで広範囲にわたる[10]。五箇山ではその後も道場の寺院化が進まず，近代に入って寺号を取得した寺も実態は道場のまま変わらないものが多い。結果として五箇山は浄土真宗の道場が数多く残る貴重な地域となった。

道場のもうひとつの特徴に「道場役（道場坊，道場もり）」の存在があげられる。五箇山の門徒が遠方にある手次寺を訪ねることはほとんどないため，道場役が門徒の管理や行事を行う。道場役はかならずしも得度をする必要がなく，勤行はするが，説教や葬式はしない[11]。ただし，交通が閉ざされる冬の葬式は道場役が執り行う。道場役は道場から離れた自分の家に住み，朝夕通って勤行をおこなう。財力に余裕がある村の有力者がなり，宗教行事だけでなく地域社会の政治と宗教の指導者を兼ねていたという[12]。

また，道場は葬具や獅子舞の道具，行事に使用される什器などの保管場所にもなっており[13]，修理や改築のさいには離村した住民からも多額の浄財がある[14]。

（２）利賀地域の念仏道場の変化

表−2および図−2は利賀地域において念仏道場が過去に存在した集落の概要である。西勝寺は寺伝では1475（文明7）年創立とされ，当初から道場ではなく寺院として創建された。近世には26の村（集落）が存在したが，統合や離村で現在は21である[15]。このうち，2014（平成26）年に使われている道場と寺は9箇所でうち8箇所は利賀川沿いにある。内訳は，当初から寺だった坂上の西勝寺，寺号を取得した利賀の興真寺，北豆谷斎光寺，内道場が上百瀬と細島と阿別当の3箇所，残り3箇所が道場のまま継続している。全体の分布をみると人口減少が進んだ北部と南部の道場が廃止されたことがわかる（図−2）。

明治期の利賀地域の一集落あたりの平均人口は152人，念仏道場がある集落の平均は209人，ない集落は90人であり，道場があるのは比較的規模の大きな集落であった[16]。栗当，栃原，押場は人口が減少し，大勘場は道場役が離村したため道場がなくなった。

西勝寺以外の道場は早ければ16世紀から成立していたとの資料が残り，遅くとも1800年頃には史料に現れるようになる[17]。唯一，上百瀬道場は近代に新しく設けられた道場である。明治末年頃に創立しその後一旦廃止されたが，聞き取りによると1965（昭和40）年頃道場役の家を建て替える際に住民の希望により集落の仏を安置するようになったということである。

利賀地区に現存する内道場以外の寺・道場の建築年代は表−2のとおりである[18]。建物がある8箇所（現存する6箇所に阿別当，大勘場を含む）の寺・道場のうち，北豆谷の斎光寺を除く7箇所はすべて1960〜70年代に再建している。斎光寺は合掌造りの道場だったが2004（平成16）年に茅屋根をトタンに葺き替えた。

３．利賀地域における仏教行事の変化[19]

利賀に存在した12箇所の道場と1箇所の寺のうち，廃村で道場役がいない3箇所（栃原，栗当，大勘場）と建物（内道場）はあるが道場役が転居した阿別当を除く9箇所の道場について，継続して居住している70歳以上の住民を対象に，約70年前（1950年前後）を目安に行事と現在までの変化を質問した（表−3）。五箇山の仏教行事は年間を通じてあり，内容は地域によって異なっている。たとえば，表−2にあげた行事のほかに「コンゴまいり」「祠堂経会」「28日講」「興仁講」「百人講」「本山講」があるとされているが，利賀地域ではみられないものもある[20]。本研究では聞き取り調査から実際に行われていた主な行事について寺または道場が主催するもの，在所（集落）が主催するものにわけ，約70年前と2014（平成26）年の変化を把握した。

（１）寺が行う行事

寺が行う主な行事には正月，春彼岸，盆，寺の報恩講，オシチヤがある。70年前と比較すると,道場がなくなった押場および新しく内道場ができた上百瀬以外，行事の有無には変化がない。また，いずれの行事も読むお経とお参りの手順には変化がない。

1）正月（修正会）

正月は氏神（神社）に初詣したあとで寺院・道場で「修正会」とよばれるお勤めがあり，その後新年会が開かれる。細島と上畠，は合同でするようになった。お勤めの後の新年会も道場ですると答えたのは岩渕と大豆谷で，北豆谷は斎光寺で開く。公民館と答えたのは上畠である。

2）春彼岸

春分を中日として7日間，寺院や道場で彼岸会のお勤めがあり，亡くなった人の供養をする[21]。春彼岸に住民が参拝するのは3箇所の寺と岩渕で，岩渕と北豆谷（斎光寺）では3月21日に行う。

3）盆

盆は寺のみで行われた。西勝寺では昔は墓参りのあとに「御座」と呼ばれる集まりがあったが今はなくなった。利賀集落の興真寺では以前は14，15，16日の三日間，南砺市池尻の真光寺から僧侶が来て滞在し朝昼晩に寺でお勤めをするので集落の者も参りにきた。しかし，皆忙しくなり，1〜2人しか参らなくなったため，15日夜の一座だけにしたという。大豆谷の集落では8月15日の朝6時からお勤めをする。10人弱の人が来て，おつまみと酒が出る。

4）寺の報恩講

報恩講は浄土真宗の開祖親鸞の祥月命日である11月28日前後に，1日〜数日ほど法要を営む。宗派によって旧暦に従う場合と新暦に従う場合があるため報恩講の時期は異なり，10月から1月にかけて営まれる[22]。報恩講の時期は集落ごとに異なっているが，いずれの集落でも以前は当番が食事を準備して賑やかに行われていた。現在は利賀の興真寺では皆で話し合い食事を出さないことに決め，現在はお茶や餅（オケソク）が配られる程度に簡略化された。また，押場では昔は周辺の集落の住民も参加していたが昭和30年代には他集落からの来訪はなくなったという。

5）オシチヤ（七昼夜）

親鸞の遺徳を偲び，祥月命日の前の7日間，昼夜に渡って法要が営まれる。宗派によって時期は異なる。利賀では近年午後から午前に変更したことでお参りする人が倍ほどに増えたという。

6）その他

上畠と細島では2月または3月の初めに老人会が上畠道場で戦没者や最近亡くなった人の追悼法要を西勝寺と上畠と細島から僧侶と道場役が来て行う。また，「ミガキモン」とよばれる仏具の手入れは上畠では老人会の法要，北豆谷は盆，岩渕ではオシチヤの前にそれぞれ行っている。

（2）利賀地域における在所（集落）が主催する行事

在所が行うおもな行事にはオコウサマ，ハツオザ，ワカイモンコウ，アマコウがある。オコウサマの道場の利用が6箇所から3箇所に減少した。アマコウは，行事はあるが道場では行われず行事そのものも半減した。変化があったオコウサマを中心に述べる。

1）オコウサマ

集落全体で先祖の供養のため法要を営む。農閑期にかけて複数回行われる。聞き取りを行った集落では細かい差はあるが，多くは11月から4月にかけて月1〜2回行う。岩渕では以前は9月から5月まで行っていたこともあるという。場所も半数は道場または寺だが，残りは公民館やコミュニティセンターで行っている。いずれの集落もオトキと呼ばれる会食は当初当番制で米などを持ち寄って供していたが，その後お茶とお菓子だけになったり（岩渕），廃止されたり（利賀）した。聞き取りによると，こどもはあまり参加せず（押場），お説教を聞いてその後食事をすることで雪深い地域での冬場の娯楽や情報交換の場として機能していた。大豆谷では終戦を機になくなったということである。

2）その他

「ワカイモンコウ（ワカコウ，ワカオコウ）」「アマコウ（アマオコウ）」「ハツオザ」の実施は集落によってばらつきがある。なくなったり，いくつかが統合されて実施されたりしているのが現状である。ワカイモンコウは講の中でもとくに若い男性が中心となって営まれる講のことで，年1回冬に行われる[23]。ハツオザは年が明けてからはじめての法座のことで元日から1月中旬にかけて行われる。ワカイモンコウが現在も道場で行われているのは上畠と岩渕である。坂上（西勝寺）では戦後にはなくなり，岩渕では時期が近いハツオザと，上百瀬では高齢化が進み老人クラブの法要と統合された。

（3）その他：個々の家の報恩講に関連する行事

個々の家で行う報恩講は寺の報恩講と意味合いは同じだが，手次の寺の僧侶や道場役が門徒の自宅に来て仏間で営まれる。親戚を呼び，皆で読経したのち説法を聞きお斎（オトキ）と呼ばれる食事をいただく[24]。報恩講は僧侶が各家を回るため集落ごとに期間がきまっている。たとえば細島では1日に3軒程度を2日間かけて，利賀では1日に4，5軒で4〜5日かけて家の報恩講が行われる。これに関連して道場では始まりの日に「ソウギ」，終了日には「ムエン」というふたつの行事が行われていた[25]。

ソウギは上畠では今でも行われているが，坂上（西勝寺）では廃止された。秋の農作業後に西勝寺で豆汁を炊いたりしたが50年ほど前にはなくなったという。上畠では昔は盛大に行っていたが当番をする人が少なくなってきたため，3年ほど前（2011年頃）から夕食をなくした。大豆谷では報恩講2日目（最終日）の晩をムエンといったが，離村する人が増えた昭和30年頃からはムエンとソウギを兼ねて道場でお勤めと説教をし，会食もない。

4．おわりに

本研究の結果から，利賀地域の念仏道場は，1箇所は寺号を取得し，4箇所が廃止された一方，1箇所は内道場として再生したことが明らかになった。多くは戦後に建物を改築しており，道場が重要な存在であったことがわかる。1950年前後と2014年の行事を比較すると，寺が行う行事の有無には大きな変化はないが，日数の減少，時間の変更，食事の簡略化など生活にあわせて内容は縮小傾向にある。在所の行事では，以前は頻繁にあった「オコウサマ」が大きく減少し，わずかに継続しているところも道場の利用が半数になった。このように数，行事において道場の利用は縮小しているものの，多くの行事が状況の変化に伴い形を変えながらお参りなど基本的な内容は変化せずに継続し，道場の維持管理も行われている。これは，人口が減少しつつもコミュニティが維持されている証左とも考えられる。

戦前までは生活基盤が農業にあり，宗教行事は娯楽や情報交換の場で生活の一部だった。頻繁に行われていた「オコウサマ」をはじめ在所主体の行事がなくなったのは，生活の多様化，若年層の減少で娯楽などの機能が不要になったこと，仏事の主な担い手であった主婦や高齢者が働きに出るなどして多忙になったことが要因であると考えられる。一方，寺や道場が行う行事は日数や食事が簡略化されながらも継続している。道場役は集落の有力者がなり寺号を取得した場合も住民の中心的な存在として代々受け継がれている。寺の行事が継続しているのは道場という空間と日常生活と結びついた宗教行事，それらを管理する道場守りを中心とするコミュニティの構造が継続しているためであると考えられる。行事と空間が一体となった求心的な存在が人口減少社会におけるコミュニティの維持に有効であることが示唆された。

補注及び引用文献

1) 平村史編纂委員会編（1985）：平村史　上巻：平村，150-151
2) 富山県教育委員会（1971）越中五箇山村の民俗：103，利賀村史編纂委員会編（2004）：利賀村史3：利賀村，962
3) 前掲1，970
4) 宇治伸(1996)：宗教的「講」と村落社会構造：令文社，pp.663，宇治伸(1999) 宗教と地域構造：令文社，pp. 229など
5) 市川秀和（2011）：越前の真宗本堂と民家の仏間にみる空間構成について 雪国の住まいと念仏の空間に関する基礎的考察：日本建築学会北陸支部研究報告集 54：一般社団法人日本建築学会，501-504
6) 真宗大谷派教科書編纂委員会(1986)：教団のあゆみ-真宗大谷派教団：真宗大谷派宗務所出版部，71-72
7) 千葉乗隆（1971）：中部山村社会の真宗：吉川弘文館，196-197
8) 前掲6，71-72
9) 利賀村史編纂委員会編（2004）：利賀村史2：利賀村，299-317
10) 利賀村史編纂委員会編（2004）：利賀村史3：利賀村，964
11) 前掲1，200-201
12) 前掲7，191
13) 富山県教育委員会（1971）:越中五箇山村の民俗，103
14) 前掲10，962
15) 1889年，2004年は前掲10，992，および2015年は南砺市の統計（大字別住民基本台帳人口及び世帯数）http://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/www/secfolder/johoseisaku/tokei_top.htm（平成27年9月7日参照）を照合した結果
16) 例外は1889(明治22)年に327人と利賀地域の中で二番目に人口が多い百瀬川集落である。百瀬川は点在する5つの小さな集落の集合であり，西勝寺と真光寺というふたつの門徒が混在しているためであると言われている。（前掲10，1036）
17) 平村史編纂委員会（1983）:平村史下巻，855
18) 前掲10，987-1036
19) 本章特に記載のないものについては聞き取り調査の結果による。
20) 前掲13，110-114
21) 前掲10，860
22) 前掲10，866
23) 前掲10，859
24) 前掲10，377-379
25) 平村史によると，ソウギ（総儀）は狭義には個々の家の報恩講を行う最初の晩に道場で行う総報恩講，「ムエン（無縁）」は村の代々の物故者供養のお経を道場であげ，若者が世話をすることで，ワカオコウにあたるとしている（前掲1，226-228）。聞き取りでは利賀地域の真光寺門徒の集落では各家の報恩講の最終日に行われる行事は「ゴマンザ」と呼ばれており，利賀，北豆谷，大豆谷では現在も続いている。